常磐東小学校　校長だより

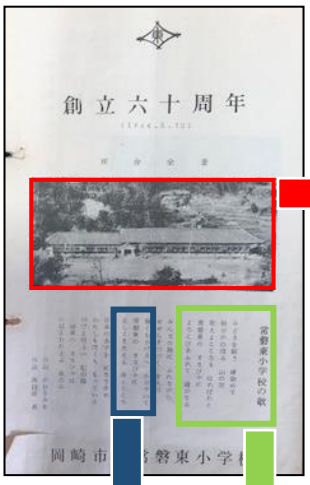
常なる磐

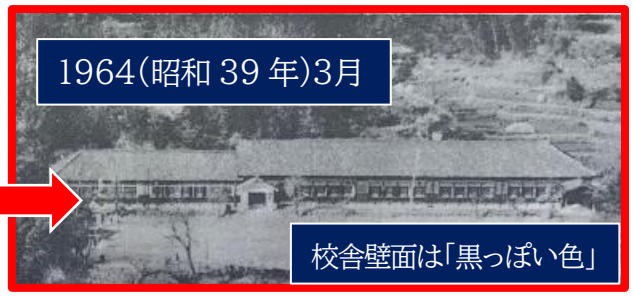
つねなる　いわ　seasonⅡ

令和　４年　１月　７日(金)

◇ 学校【沿革史】を 紐解いて❷　校舎と校歌

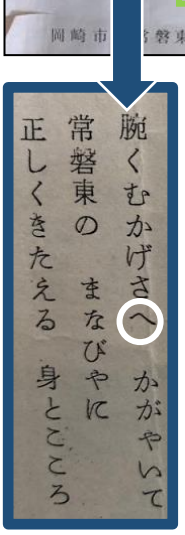
＜創立60周年(1964.3月)記念リーフレット 表紙＞:【沿革史 第２集】とじ込み記録 より

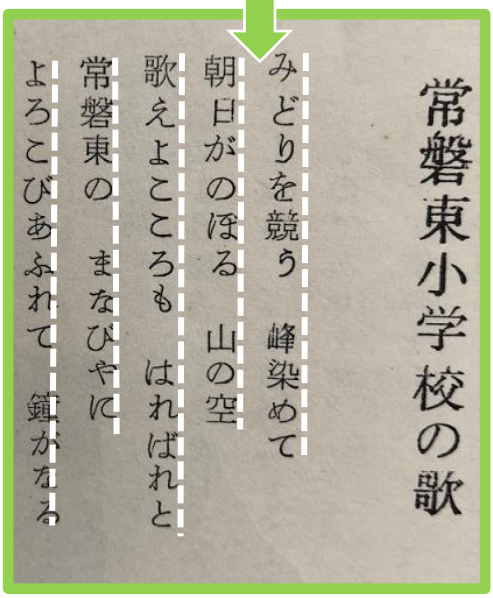




「リーフレット」表紙の学校全景写真。モノクロで印刷粒子も粗いためか、木造校舎の外壁は濃色に見える。そこで、拡大鏡で確認。「茶色壁」か「黒壁」といった風合いだ。

そして、下の写真が２２年後の昭和６１年(1983)に撮影された航空写真。カラー写真で確認できる「白壁」の校舎。旧校舎も、昭和 43 年の外壁塗装によって、濃色から【白亜の校舎】へと装いを新たにしていたのだ。





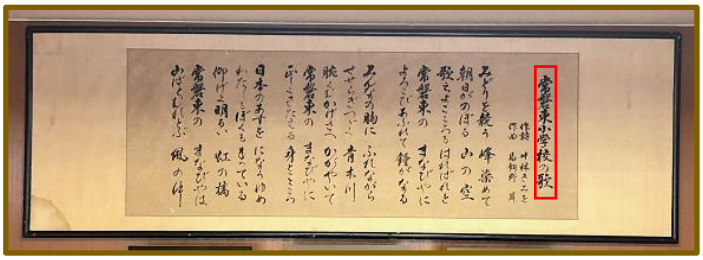
開校 60 周年を記念して作られた「校歌」。けれども、リーフレットの記載にあるように、当時の名称は【常磐東小学校の歌】。この呼称は、校歌碑や校歌額の表記も同じで、統一されている。

（※詳細は裏面に）

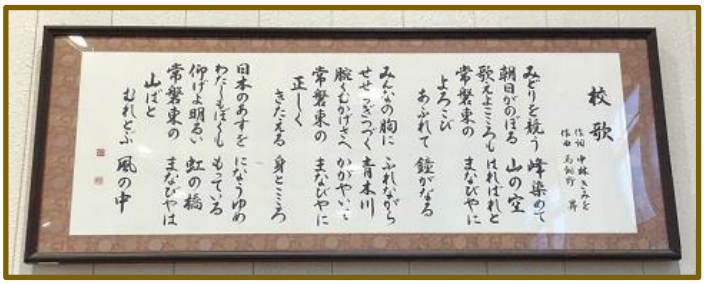
リーフレット記載の校歌の歌詞を拡大したのが左写真。(緑枠■)

縦に並んだ文字列をよく見ると、縦軸(白破線)に対し、左右に若干のばらつきがあるのに気付いただろうか。

これは、学校では、俗称「ガリ版（謄写版(とうしゃばん)と鉄筆(てっぴつ)）」で印刷物の原稿を作成するのが主流だった当時、新兵器として登場した「和文タイプライター」が使用されたことを物語っている。



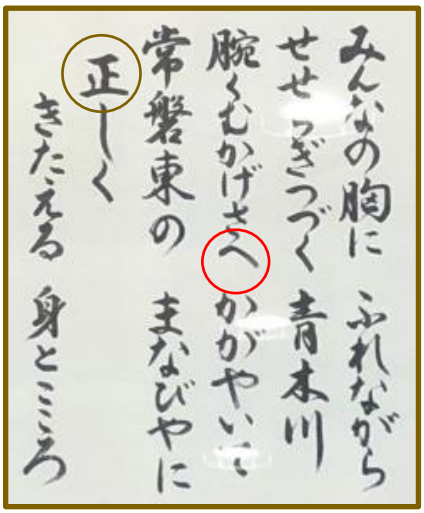
旧・新 2 枚の校歌額を並べてみた。ずいぶん「色目」が異なる。「茶」と「白」ほどの違いだ。
上段額の書額や表装の「色み」から、校歌制定 60 年あまりの歴史を感じさせる。



この上段の額、新校歌額への掛け替えとともに、校庭脇の体育倉庫に眠っていたものを、倉庫整理にあたっていた校務主任が、倉庫奥からたまたま発見したのだ。大発見である。かぶっていた埃（ほこり）を落とし、現在は校長室に掲げている。

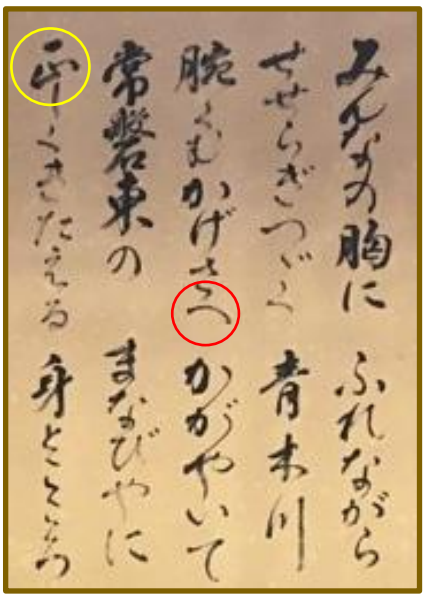
さて、上段の表題は、やはり【常磐東小学校の歌】との記載。
対して、現在、体育館に掲げられている新しい額の表題は、【校　歌】とある。どこかで呼称を変更したのだろう。

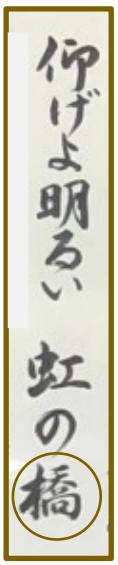
新校歌額の落款から、岡崎市出身の有名書家「鈴木紫龍（しりゅう）」先生の揮毫（きごう）であることが確認できた。紫龍先生は、岡崎市内の小中学校の校歌の額を数多く揮毫されている。文字は力強さに温かさや柔らかさを併せもち、素人の自分が見ても本当に素敵な文字で、校歌にぴったりである。



そして、新旧２枚の校歌額。
文字を並べてみると、瓜二つとは言わないが、筆の運びが本当によく似ている。
旧校歌額には落款（らっかん）は無いものの、やはり鈴木紫龍先生の揮毫（きごう）によるものではないかと思われる。

校歌２番の大きな違いは「正」の文字。
新校歌額が「楷書体」であるのに対し、旧は「草書体」。
さらに校歌３番の「橋」は、旧字体の「槁」となっている。





送り仮名の変化も然り。
２番の「腕組む　がげさ[へ]　ががやいて」は、
現在は「腕組む　がげさ[え]　かがやいて」に。

新校歌額が体育館に掲げられたのは、昭和 62 年４月の校舎新築移転以降。校歌制定から 20 年以上後のことだ。

書額や表装のようす、さらに「草書」と「楷書」、「旧字」、「送り仮名」といったところに、年月の経過と歴史を感じるのである。

次回は、【校歌碑】について紹介する。